

粹學新論一杯戲言

初編上

柳田文庫

文庫11

A1906

1

10

15

20

25

文庫 11

A 1906

花柳醉史 戲著

癖を新諦に極む

癖を極む

序

摸^モ史^シ比^ヒ涅^ネも毒^{ドク}割^{ガイ}する頃止^ム礼^レ兒^キ尼^ニは
毒^{ドク}割^{ガイ}する頃止^ム摸^モ史^シ比^ヒ涅^ネの毒^{ドク}中^{ナカ}に
て神^{カミ}心^{ココロ}恍惚^{クウコ}醉^{スイ}夢^ムの如^{ごと}く侍^{サマ}床^{トコ}痺^{シビ}して
死^シんと欲^{ホシ}する頃止^ム礼^レ兒^キ尼^ニを投^{ナゲ}て
於^オ生^{ナマ}死^シを救^{サツ}ふとては乃^{すなは}ち頃止^ム礼^レ兒^キ尼^ニ
の毒^{ドク}一^{ヒト}歳^{サイ}一^{ヒト}背^セ脊^{コウ}屈^{クツ}折^{セツ}とて拘^{コウ}攣^{レン}苦^ク惱^{ノウ}
血^{ケツ}を吐^{ハク}きて將^{マカ}に死^シんとする者^{モノ}ありて是^{コト}を

序

48-8200

模範は淫を用る時々或は毒を去りて
一生で九死の中に余をも廻り一蓋
是れ毒の投するは毒をとりて一毒
をとりて互に相制しお歴々遂に毒
害を人種に與ふこと能はざるは進化
自然の配割りにて只醫學の上の事なり
世間の事の事と物と此理の存在を
さうとせざるあり今花柳毒の付量を

著し一説して粹學新論一巻を成さんと
曰ふあるは此は我々のあるもの乎是は
俗俗を戒むるに儒教をもつて一西
學家の説は佛教を以て酒やめを
責るに茶論をもつて一毛柳毒の
毒人を醒さんとするに四角四面の野言
狂言をもつてはさかぬそれ人を
誘導するは是と得たりと況んや

何と云ふに人々嗜好するところあり又
名々嫌悪する所ある所ある嫌悪するところ
の説を將て其嗜好するところのものを
排斥せしむるに過ぎず則ち誰か得て之は
甘腹をんや堂人非ざるなり則ち又從て
其説を排し他乃政教を常んとして
勢も力もなきのそ是れこそとて金用の
戒無切乃漢書と漢書彼の模範

比涅槃の中者と敎をんと欲して之は
寶丹を授け須止孔親尼害を罹るもの
を療せんや是に精騎水と與ふこと
の如何をの擇まん其友は伴侶を我ん
と欲する必ち佛を以てせん儒を
西学家の議論を以てせん佛を以てせん
法家を賣るゝ酒論を以てせん遊樂を
以てせん此の如きものも又彼の

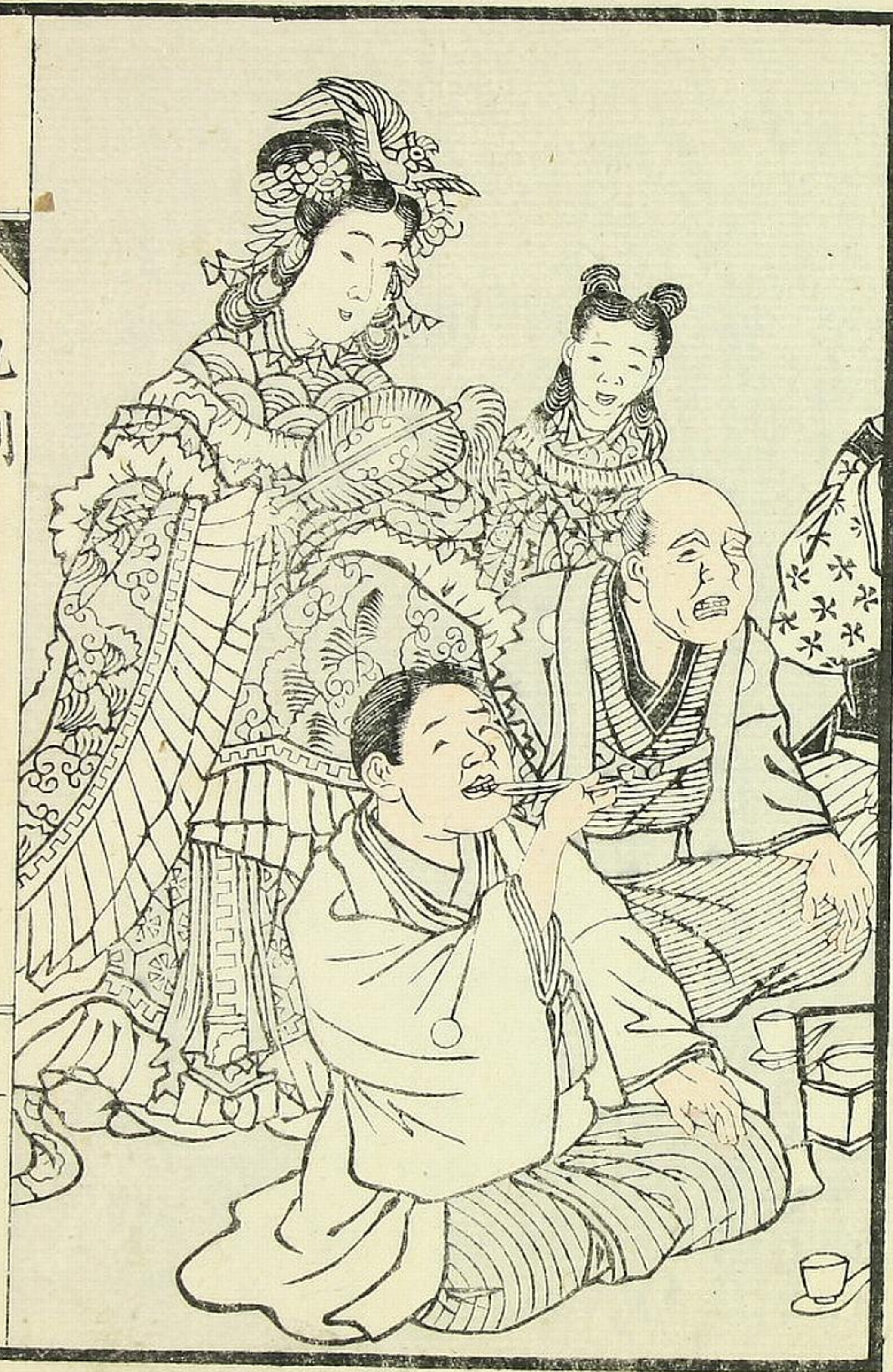
業備と四角の面的聖なる。理や處とを以て
た。海このちるなるを新のゆくゝて。而後
始ておぬ戒法。導のさで得たりと云ふま
なり孟軻の列國は遊説するに當り或は
きで好むの端を去り。或は貨を好むの
弊を作らるゝ。或は毒を以て人を
洗むんとす。此激をこるゝ。嗚呼。昔あるは
毛柳。酸史の山著あるは。語は白く。毒業

又。種人。酸史の。き。抑り。粹学。通曉
あるの。ち。ある。能く。醫學。通曉
する。此。す。て。得る。る。れ。序。文。を。徴。し
る。に。方。り。酸。史。を。以。て。之。を。考。首。に。記。す。と
惟。時。明。治。十。三。年。八。月。上。浣

羊肋山人喜雨識

時子子





凡例

○此書起る処物はな一倡客傳授の巻等の糟粕を羅つと編む故に文花倣倣をる者少いとせば加之専ら滑稽を以て本とせざるなれば全文傍訓共は假名を正せし違あらば殊に詞花言葉の野卑なるハ作者故とせざるものなり

○贅言出放題なる事ハ言を俟たれ共巻中の引書其他議論の如きものハ総て

出放題とあらば

○終始滑稽出放題なりと雖も勸善懲惡を旨とせざるなれば初編より五編小及び全部十冊蕩吉が一期盛衰物語をめと富貴利達も一炊の夢なるよしを知らしむ

初編目次

第一回

浅草辺の白屋

生物識の怪談

第二回

白眉神の教訓

半可通の箴諷

第三回

導悟庵の款待

比翼塚の神社

第四回

今昔遊女の故事

粹老妓論の裁判

初編上下目次終



粹学新論一盃戲言初編上の巻



東京 花柳醉史戲著

第壹回

浅草邊の茅屋

生物識の怪談

春宵一刻のうちに戯れる。千金の價を以て根引
を。宿の花に詠むる庭に鶯の初音。閑なる春
を告。田圃の蛙比哥る。留連の雨を乞て。客を留
め。晦日の月比。真丸。卯の四角。文字。我照生。向



粹学新論一盃戲言初編上の巻

の人呼。廓公。廓をががきの。夕つくひ。雲もへ。想へ
る。衣裳も。花も。想へる。容も。之も。由縁の唐
土や。清平調の。詞。此花も。花艶も。とて容も。如也。然
れど。老て。花も。如也。顧ふ。往昔。日。暮て。野
ふ。臥も。宿借も。浅草寺の。一家も。詠も。い
ま。引変り。浅茅。原の露も。咲く。花の名どころ。
戀草の。盛り。目枯ぬ。花街の。近き。遷り。庵を。結び。風
流。儼雅も。遊ぶ。といへば。子細ら。い。か。定あり
の。九尺三間も。上藏。つ。す。家主の名。自惚屋。蕩

吉と稱て。活業。曖昧。として。不解ねど。粹学指南
と題したる。標札を。掲け。活動。かり。知識風。ことへ。
前人。ふ。軟て。後世を。壓も。といふ。了簡。へ。視る。も
足ねど。其行過。なる。ことへ。何處まで。行過。たる。り。
測量家も。亦三舍を。避く。庵。其癖。学び。更。み。な
く。書籍。へ。双紙物語。都々逸。端唄。部類。など。西東少
一宛。覗い。その。聴学。十二三分の。知識風。一寸女
房。物云。さへも。聞た。風土の。漢語。を用ひ。女郎。買
を。以て。吾が。専門。学。と。世間の。人。へ。氣保養。とて。花

街へも。行なるふ。此男へ。偶も。自家へ帰れば。年季
者の。宿入の思ひをなす。今日も朝うら。昨日はつ
られを。休めんと。假寐の夢あらで。眠られぬ俣み。
青樓小袖と。云草紙を。讀うけて居たり。が。總論
の條に。至りて。讀下を其文ふ。云く。人々遊女を買
て。持たと云べ。勤と云字。氣が附ぬ。との理屈
もせめぬ。勤と云字。氣が附べ。孰り樓中へ。歩
を運むん哉。此里へ入程あらば。面白く遊びて。友
達へ話を。振れさ。云より持たと云。聞へ

もよし。何程惚。客なればとて。初會うら。實も西
うされま。先うけて。くる宛て置て。其上重ねて。
来る時へ。虚う。實も。出るぞ。一。心。讀
折うら。表の方。人音。て。入来るハ之れ。誰な
らむ。同ト生物識の。志人たる。同氣求むる馬鹿連
中。名ハ。糠助と稱て。野暮此うへも無き。奴なれど。
自ら通なりと許して。可厭。外見ふ。り。聲氣を威
して。蕩吉と莫逆の友たり。遊びも飽。徒。今蕩
吉を訪んと。頓て格子を押開て。案内も得せ。直

と市ぐり。珍らゝ哉。主人の在宿何を頻り
讀給ふと。云。這方も起あがりて。否。喃。今日。偶
の宿下。未たれば。退屈して。寐あらんと為れど。
寐られぬ。俤。専門。学。み。取。か。う。り。讀。を。し。た。る
處。な。る。み。幸。ひ。足。下。の。未。臨。ゆ。て。亦。慰。さ。む。る。便。を
得。た。り。緩。と。語。て。行。た。ま。へ。と。云。ハ。糠。助。打。笑。て。然
れば。僕。も。其。通。り。退。屈。み。堪。さ。る。もの。う。ら。因。て
足。下。を。訪。ふ。も。今。日。ハ。必。ず。在。宿。を。ら。ん。と。推。せ
し。智。畧。ハ。賞。給。へ。夫。ハ。左。も。あ。れ。足。下。の。今。迫。讀。を

し。た。る。書。籍。と。云。ハ。成。程。青。樓。小。袖。な。ら。ん。這。ハ
僕。も。去。る。頃。熟。覽。せ。し。更。も。あ。れ。ど。取。難。き。説。の。多
し。と。思。へ。る。足。下。ハ。何。と。う。思。ひ。給。ふ。と。問。れ。て。蕩
吉。打。領。さ。僕。ハ。初。て。聞。き。る。な。れ。ば。猶。委。し。く。ハ。解
し。得。ね。ど。言。う。如。く。み。思。へ。る。往。昔。よ。り。し。て
双。紙。の。類。夥。多。あ。れ。と。も。一。を。聴。て。二。を。知。ぬ。實。知
の。經。儉。る。疎。さ。戯。作。者。流。の。虛。寐。語。ハ。一。ハ。よ。し。や
半。分。も。取。處。な。き。を。如。何。よ。ぞ。や。青。樓。小。袖。と。至。誠
ら。し。く。標。題。ば。う。り。面。白。そ。う。で。総。論。の。様。ハ。笑。ふ

不堪たり勤と云字は氣が附ハ誰う樓中へ歩を
運むん哉こハ亦これ不審の第一なり。斯て振れ
て還るとも持たと云べ。聞へもよし。採卑劣を云
ふも。程社あら欠然ハ非をや。と問けるふ。糠助答
へて。然ればなり。勤と云字は氣が附ハ社歩を運
ふ人もあれ。斯一槩は云ときハ。世界は粹の無き
が如けん。譬へ。夥多の菓物ありとも。名も知れぬ。
菓物あらべ。孰う之を食もの有ん。其實を知され
ば。歩を運ふ者もなし。自己の知さる事ハ。夢と難

いと。古人も謂う。おもふも。這等も。無理ハあり
ぬ。僕や足下ハ。異人なれど。浮世の野夫奴ハ。斯
の如く。勤と云字も知む。行。之も亦知。應。ら
む。と云。バ。蕩吉。嗟歎して。否とよ。糠君。聴給へ。知ら
む。バ。猶も。教を説きて。目出度勤の
道理も知せ。

粹学指南

自惚軒

碎學新論一不或言初編卷之五



碎學新論一不或言初編卷之五



粹さいみをるこそ。作者さくしやの功こう哀あはしい哉や。世よの中ちゅうも。實じつ学がく疎そ乏ふの作者さくしやをして。斯かくる著述しやくしふを遺のこせときハ。後世こうせいの人ひと之を信しんト。其過そのあやまちを解とくハ由よしナシ。終つひふハ。倡客しやうかく真話しんわの秘傳ひでんも。絶たいなんト。為なるふ至いたる處ところ。僕ぼくも指さ南なんを業がふと為なるれば。今いまよりして。草くさを興おこシ。悟さとりも得えたる。遊趣ゆうしゆを著あつシ。人ひとの為ためハ。ある耳みみならん。我われが粹名さいめいを千載せんざいの。後のちまで傳つたへんと思おもふハ如何いかハ。と謂いハ。糠助ぬかうすけ打點頭うちてんづき。奇きあり妙めう也。不思議ふしぎ也。能よこそ其處そこハ。氣きが附つたり。僕ぼくも足下そくちやうとハ。莫逆もぎやくめて。互たひハ

遊あそび。其甲斐そのかいハ。此道このみちにてハ。何國いづくにの浦うら。何國いづくにの果迄えんて至いたるとも。及およばん者ものハ。非トと思おもふ。然されば。供とも侶りやう力を協あはして。著述しやくしふを為なさば。後世こうせい迄まで放蕩はうたう無頼ぶらいの徒ともハ。身代みんだいを踏破ふみやぶせ。一助いちすけとならんハ。必定ひつていなり。善ぜんハ急いそげ。と云いうらハ。思おもひ附つ日ひハ。大吉たいきち日ひなり。今日けふ日ひより。筆ふでを採とたまへ。斯かくてハ僕ぼくも一奔ひとをり。家いへ居あまりへりて狸たぬきの卷まき。其他その他の引書けんしよを携たづへ来きらん。暫しばし待まちねと謂い捨て。行ゆんとせれば。蕩言たうごんハ。必かな待まちたもへ足下あしもとより。鳥とりの立たごと急いそがんより。一献いっけん酌しやくで。

話も有ん。荆妻も風呂もや行たりけん。雖然間もなく、帰りも来らん。待わくと留むれば、否々家婦のかへらん迄。僕も亦一奔ふ。往て来らん社便よけれ。其中にも家婦の帰らば、珠味を堆て待給へ。と言葉残して、出行けり去程。蕩吉へ。嗟急々。き人なる哉。と獨り詢き、おもふやう。縦令著述を爲るとい謂趣向を立ね。書事難し。乍去難し。と悩む時。成座きとたも。無らん。俟よ。何まれ書はとえんと。獨り領き突と起て、形容もか

さり置唐机の塵打拂ひ。自己が獨の娛樂も、留主守るある其妻へ。あそれと知ぬ。白粥も、歎兼たる硯匣手もとる筆の命毛も。神の報ひ。人むれて、耻をりくある。紙だも。負債が為。責られて、日延証書。残りなる。罰紙数枚を取出し。傾く日。うげ。最薄き。墨せり流せ。折こそあれ。何くともなく、忽然と一人の仙童女の身。ハ錦繡を纏ひ。頭ハ。花の冠を戴き。あるが。衣香馥々として。蕩吉が側近く進と来れ。蕩吉嗟哉とをかり。胆を消

し。餘りの事は胸轟きぬれど。漸に心を鎮めて。山
童女は打對ひ。人間にありともおもひぬ乙
女子。何処より。何故ありて。此茅屋へ。訪給ひ
し。と問へば。仙童女へ。悠々として。否とよ我へ。遠
くも阿らぬ。姑射の女仙の御使なり。我が仙嬢。早
既。汝が遊門の秘傳を。著述せんと欲するを。知
れし給ひ。教へ授けんと。思ふことしも阿れば。誘
ひ来よとの命なり。弩怠漫なせそ。と宜ふもぞ。蕩
吉ハ慄慄と。夢うと許し。疑ひ惑ひて。頓に答もせ

ざりしが又熟と顧ふやう。成程これハ神仙う。そ
れうあらぬ。夢よせよ。夢ならばなど覺ざらん。
斯る不思議ハ有まじ。と許云て。應ねば。如何
なる崇りの。出来るやらん。今仙童女の謂つるま
へ。教へ授ける事ありと。然れば。俺も何うハ知ら
ぬ。教える事の。あるならん。よしや女仙ハ神もせ
よ。犯せる罪の無らん。何て怖る事うハと。
思案を。左に。さあらぬ。体にて。命の赴き。兼給ハ
りぬ。と應を。それば。仙童女へ。卒案内せん。疾く来

ねと堰る。保る詮方なく。生る心地もあら無。後もや残る我妻のさぞや帰りを松虫といひ鳴る。鈴虫の輪回應報。過世の業と。悟らば思ひ蟋蟀。明日へ何処の人あらんと。思へば憂と唧ちつ。室をならえて出行けり

第二回

白眉神の教訓
半可通の箴誠

再説蕩吉ハ。仙童ハ案内せられて。怖るかそる後。に従ひ。行事若干里ありて。嵯峨たる。高峯に来り

けり。但見バ。一座の樓閣ありて。茂林の間より。顕れたる。薨ハ雲に聳たり。猶西風東風と見うへる。袖の紅と詠たる。瞿麥草ハ。色を増し。戀草。ちと草。金露草。見るも思ひの牡丹。其他茂れる八重葎。視熟ぬ草木。多くあり。樹毎に咲る。花の香ハ。馥郁として。尋常ならむ。實は三千年なる。桃。やあらん。連理の枝に。數啼ハ。是ぞ實は比翼の鳥歟。清亮として。其聲妙ハ。浮世の外。の調に似たり。那桃源に。帰路を忘れ。龍宮に。老を思へぬ。浦島の子

も。武陸の民も。斯ありけんとかもふ許り。蕩吉へ。
瞬きもせむ。打ちまもり。茫然として物たふ謂を。仙
童女へ。頓て門扇を押開き。卒這方へと。言うけて。
先より立て。案内をせむるもぞ。蕩吉へ。慘慄と。心中大
いよ怖れを抱き。披れて内より入つゝ見るも。金精
玉笑へ。丹墀の内より敷き。瑤珠珊瑚。玄圃の表より
満てり。黄金をせむるも。踏渡らんとせむるも。暝映
く。伽羅もて造りし歩廊へ。蕙蘭の室より入ると思
ふ。瑪瑙の柱。瑠璃の床。皆人間の物なりぬ。奇麗壯

白眉神
夜院
外
言
三
矢

観画る如く。美を尽したる有様へ。夢欲現欲と思
ひつゝ。奥より入程も。既に幾間より打過たる。南面より
匾額あり。心ともなく仰ぎ見れば。白眉神観と。四
の金字を題したる。前面遙の高座に。綾の褥を累
ね布て。悠然として座し給ふ。正之。仙嬢みや
あらん。丹華の唇。娥黛の眉。玉よりも清らなる。
膚素透る。那身の光り。赫奕として。天津乙女の
舞樂も勝れり。神女の衣香。馥々として。春風の百
花香を送るも似たり。飄聲錯々として。秋調の萬

籟の響を韵まが如し。緑髻長く肩に垂れ。三十二
相具足して。神欲人欲と怪れる。高く捲せし珠簾
へ。焼占たる香烟峯の。雪に旭の照まが如く。掛
したる綾の帳に。風は靡く五朶の雲の。緞に花を
降せが如し。既にして仙嬢へ。蕩吉が仙童女。案
内せられて。未れるを視て。這方へ来よと。迎り近
く招うせ給ふ。蕩吉は少し心安堵て。遙這方
に跪づき。漸く心を励まして。云りける。神女何の
縁故ありて。俺を召れ給ふや。俺へ。元来東京浅草

の辺の。住民なれども。性質至て。遊優を好む。名
へ蕩吉と。呼なむ者あり。夜となく。昼となく。花柳
の巷に遊べども。敢て人な妨げせし。更なけれ
ば。況てや。人を害ひし。更あり。願ふに俺が役を解
きて。早く家居に帰させ給へ。と只管願ひ訴ふ
る。も。此時仙嬢へ。完ふとして。善哉。蕩子恐怖更
勿れ。汝を這處へ。招き寄せし。汝は論ん事ある
故あり然れば。今我說處を。心を静止て。聴かよう
。夫唐土の地。まじり。漢に游女ありと。唄ひ。天

望此貝多羅。街賣女色。と。わさのえを。伊弉諾伊
弉冉の二神。へ。床柱。も。寄給へ。び。蒼海原の青傘
も。萌さ。などの。叙。と。ひ。て。出合の。一。穴。も。え。や。と。天
神七代。五代。參。地。色。許。を。稼。給。へ。び。今。社。人。皇。の
世。となり。て。伊勢源氏。此。物語。も。指。切。髪。切。の。實
少。なく。二。条。の。后。若。紫。も。全。盛。の。意。氣。地。心。も。と。な
し。風流。此。罪。過。と。云。こ。も。實。を。以。て。罪。過。に。沈。ま。ば。
終。よ。い。悟。道。処。も。あ。り。ん。偶。汝。が。や。う。な。者。も。乾。坤
の。間。に。生。れ。き。て。粹。学。指。南。を。為。る。と。り。聞。バ。聊。う

取得。へ。有。な。り。ん。然。れ。と。古。人。喜。三。二。が。青。樓。之。曲
に。説。れ。た。る。寶。識。有。て。譯。識。無。し。と。い。は。汝。等。が。事。を
る。趣。に。な。ま。し。い。寶。を。知。た。る。う。ら。み。自。認。許。先。に
立。て。自。己。より。他。に。此。道。へ。通。ぜ。し。もの。に。有。し。と
思。ひ。調。も。と。ば。う。て。著。述。を。遺。さ。ば。人。の。笑。へ。受。る
と。も。絶。て。其。功。無。る。べ。し。我。只。其。志。に。有。て。其。学
を。可。愍。み。思。へ。ば。與。義。を。教。へ。授。く。る。あり。然
れ。バ。著。述。を。遺。さ。ん。と。心。附。ハ。些。賞。を。れ。と。遊。の。譯
ハ。知。由。な。し。遊。の。譯。を。知。む。し。て。只。寶。を。り。書。遺

さ。粹を教ふるに非びて。却て糠を授くる耳なり。之游治倡客。益なきのとなり。赤繩神への
恐惶あり。汝ハ少く慢心したれば。這等の意ハ。
附ざるをけれど。自分免許の好男子ハ。當世甚ど
廢りぞう。譯を識て。竅を云ハ可なれども。知ざ
る者ハ痕穴をいふ。是社穿寄の罪入なり。と廓の
意氣地此序に見へたり。よ。兩達ハ至らばと
も。少く譯を知ての後。夫ハ其が竅を記もせ
ば。古人鯛糸。意も協せん。然れば此義を論さ

んとて。汝を招き寄たるなり。嚮も汝ハ双紙を
見て。其意を得ぬとて。罵られたれど。汝が如き生物
識てハ。解し得難き双紙ぞや。然れば其意を誤讀
て。端無く古人を罵詈事。其罪誠ハ輕うら。那青
樓小袖と題せる双紙ハ。山旭亭が著す。処卯の四
角ハキの字ハ止まり。女郎の實ハ意氣地ハ止ま
り。其君子の止まる處を以て号け。壺名を孔雀
漆勒記と題したる。意味深遠の。双紙なれば。二枚
三枚覗いとて。徹頭徹尾を尽さば。何を以て

う解き居た。碌々錢も費て見れ。長屋まゐり。人
熟と。生半可通か。一生の瑕瑾で。自分許兼知して
も。一生人の粹とい謂れ。人ハ何も知ぬと思ひ
て。其為る事を野暮と一笑ひ。茶屋女郎ハ馬鹿
れまい。何一自己が懸るもの。と。一呑みしと
了簡で。揚る早速穴を鏡舌。年齒も積ぬ女郎等。も。
唾壺の中へも。這入度思ひをさせ。獨機嫌で。虚空
み。志とあり。朋友ハ粹を見せたがり。譯も知む
穴の云へ。不粹の尤も不粹といふ。穴を知ても

鴉六鵲三作ル
大雀四後進
上虎文アリ性
群居文俗呼デ
獨物ト云テ老
故云後進子
ト云フ。進カ俗
考見タリ今ヤ
ヤリテト訓スモ
ノ蓋シモリ
脱化ト来リ

知ざる顔で。手練手管みかけられても。損無き事
なら。十分。愚ハ遊ぶのハ厭氣を離れて。娛樂も
亦十倍ならん。那ちよく。傳杯ハ。金銀を遣
ハせ。て。女郎を自在ニ弄ぶ。好男子なり。と記
されたれど。是等ハ下粹の言語。し。て。素より論
ぜる処なり。鴉兒の笑ひ。あ。ねども。作者の意
が見たき。非びや。然れば。傾城禁短氣記。も。黄
金を費ハせ。て。誰ハ粹と云れんより。寧ろ此身
ハ野夫と為て。黄金を散りたり。と。宜なる哉。此言



や。汝は是を何とう思ふ。假令粹裡に入とハいへ。
家産を破らば粹なりても。誠の粹ニハあらばう
。今黄金を散りたりと。有ど其意ハ中ふあり。費
。ぬよりも費ひたりと。謂ハ自と費ふより。費ハ
ぬと謂反對の趣意も含めて。中ふあり。費さび
て。吝ならぬ。是を号けて中と云。中庸の道茲ニ有
。同トことなら。吝なるより。費ふを以て通と云
。ど。亦自う其術あれば。譯なく。是を散むる時ハ。
損して笑を買ふ事のと。知り。びや道樂指南ニも。

愉快を取ハ黄金ニ有ありと。雖ども。譯なく。散
て。割烹店の厨所も。糞でも。舐へと。競べ立るハ。大
間拔の兇天。上大筈棒の親玉。まで。殺錢費ひの唐
偏僕と。醉多道士も。説れたり。彼と這とハ事異れ
ど。道樂の道ハ一なり。此の道理を悟りも得バ。
不通も何時う粹となり。真の快味を知る時あ
らん。嚮もも兼て示せ。如く。汝が如き。半可通ハ。
野夫もも劣た者ぞう。竅を知ら。愛憎も尽。何
り無上。斯でもない。彼でも無と。付散してハ。漬

物茶漬の外へな。掛らるゝのも振るゝ。此も解
らね。社菜さへあれば。何時でも飯へ甘く喫ふ。
這等ハ野夫此一徳なれど。自惚強く通人。と。視せ
んと思へ。何うハ附て。朝も夕も。心の遣ひ。之等
が如前。野夫の上壁より。や女の好風俗で。誰も否
と。ハ岩本の神の化身。源氏此君の再来ならん
と。見違ふ男子。も。這等の図圖を。脱せぬ中ハ。目出
度。粹よ。ハ。成難うらん。然れど。少ハ。譯も。知。穴を
知。ある其時ハ。野夫と厭状ハ。掩るゝ。故。夫れ人ハ

ハ見へざれども。誠の粹と云ふ有ね。ハ。一癖去
て。一癖生。其身の快樂甚。少ハ。遊の様。うら一
風。変れば。女郎其他の身。此上。うら。客の達。引。何ま
れ。ハ。ま。れ。皆。吞。込。て。心。み。お。と。ハ。氣。を。通。して。穴。を
云。び。自。分。の。遊。び。ハ。擲。捨。て。遊。バ。は。る。事。許。を。心。懸
る。が。第。一。杯。と。高。辨。ハ。吐。散。せ。ど。そ。ハ。亦。那。奴。が。遊
び。を。觀。れ。ハ。初。會。う。ら。氣。取。を。專。と。ハ。汚。通。澄。して
語。數。云。び。三。絃。彈。ハ。藝。人。め。く。歌。と。囂。ぎ。ハ。幫。間。め
く。淨。瑠。璃。小。唄。ハ。儉。漢。め。く。拳。酒。乱。酒。ハ。書。生。め。く。

と管らぬ疝氣を頭痛に悩ま。餘を学ぶを好う
と心得否に氣取て床脇の柱を自己が陳座とさ
だえ容体風故他見て。床急ぎうと推を通。漸
やく宴席が收れど。そこ墓と無く。物いとねに氣
詰りのせる客人おやと。物云さへも速慮して吸
附て出せ。長管のさせる女郎に。被客の中へ這入
り。せる者の互ふ顔を見合せて。何と云よる便も
無く。下生まれううと思へば社端となく。云も
出さば實情に郎君に。鬱悶とさい外よと。謂れと

許み乗地が来て。忽ち慢氣が身にあふれ。自己が
粹故端たなく。取扱へぬも道理と領き。是うら
徐々十八番の空寐入。取掛れば。女郎の家業が
大切故若へ。若へと揺起せば。空寐の眼目をこそ
りまへ。嗟起さば。寐ういて呉れ。這へに緩々
寐み来と杯と。取ものも取らば。秘事にも這入ら
び。とたよりぬのを。通たとかもひ。亦寐入あり。高
駒きて。起しても。揺つても。性が無う。這方でも。
寐度なる故。徐々睡眠。心柄うら身動きもせは。

痒い処も搔ぎ堪忍て寐入と真似して居る眼
を開き。女郎の睡眠を覚さぬ様ふ。そつと抜出て。
薫る煙草も叩く響のせぬ様ふと。此様を更
まで心を傷め。遊ぶも名詮自性と云ふ。汝へ定
えて面白ない。長談義ぢやと思やうが。此等の
処が。游客の肝要とする処あり。長くも有ね。今
少し。欠伸を堪忍て聴聞せよ。我人間ふあり。頃
月下の翁が説れ。一更あり。虚へ實の骨よりて。實
へ虚の皮なるを。迷ふも則ち色里みて。悟るも

則ち色里なりと。然れば今迄説来れるは。粹も
近き人の上あり。近くと云ふも。悟るは。中々ふ
遠うちん。寧ろ不粹は。不粹だけ。其身は取て。樂
とあれど。帶はや短う。袴みや長き。半可通故身
で身を詰えて。自己が粹を樂むものうら。抱て寐
よとの衾の裡も。是で。定て五月蠅うらふ。湿濃
からふと。氣を兼ねて。女郎を寐うを粹と思ひ。
孫むくも無目を。無理ふ睡り。空睡眠は。大骨を折
る。是を号けて。田野恠と云。皆我が我身を苦く

て、黄金を散り窮屈を買も粹が身を食ふ。煩惱な
るを。左右汝も心ありて、花柳の情味を知らく
欲せど。凡夫悟るに難ければ。我先端緒を繕とく
の。斯て猶教る事あり。我此仙觀を距事。幾子も
有む。て。飛魂消肉の愉快國あり。稱て傾城傾國
と云。輕薄淫奔の國なれども。月下の翁の説かれ
し如く。迷ふも色里。悟るも亦色里なれば。是より
して。汝も此國へ遊歴せば。惑ひも晴て。或ハ亦悟
る処もあらん。り。意ありや如何。ふと。問せ給へ

ハ。蕩吉ハ初めより。聴夏毎に肝胆に徹し。全身殊
に汗まる迄暫く心は愧る。と雖も。且感。且悦び。
頭をもたげ打拜して。對冲ハ最も惶。仙嬢のお
ん訓へ。なとて否。奉つらんや。有難き迄。奈。丁
寧なるおん論。みて宿疑一朝に永解せり。附て
亦問たてまつる。仙嬢ハ如何なる人にて。御名ハ
何と稱せ給ふ。心得たりと云ければ。仙嬢吻吻
と打笑給ひ。見らる。如く我ハ山人。素より。名も
なく。氏もなし。益なき事を問んより。早速傾國に

赴^{おもむ}うへ。再^{また}會^{あひ}の日も近^ききあらん。然^されど執^{しやう}行^{ぎやう}の事^{こと}ふゝあれば。何^{いづ}國^{こく}の浦^{うら}み至^{いた}りても人^{ひと}み降^{くだ}て教^か授^{じゆ}を受けよ。必^{かなら}び慢^{まん}氣^きを生^うむる時^{とき}へ。こよなき耻^ち辱^{じよく}を蒙^{まう}る處^{ところ}。言^いへき夏^{なつ}は是^{これ}迄^{まで}ありと。頓^{とん}て仙^{せん}童^{どう}女子^{こし}意^い得^えさして。一^{ひと}包^{つづ}此^{この}名^な香^{かう}を。蕩^{たう}吉^{きち}み與^あへ。且^{かつ}謂^いらる。行^{かう}んと欲^{かう}せば此^{この}香^{かう}を焼^やき。歸^{かへ}らんと欲^{かう}するも其^{その}如^{ごと}く。烟^けを案^{あん}内^{ない}み往^{かう}来^{らい}せば。欲^{かう}する處^{ところ}み至^{いた}る處^{ところ}。此^{この}旨^{あじ}等^ら々^々忘^{わす}る。勿^なれど。論^{ろん}へて更^{さら}に焼^や占^{せん}る。香^{かう}の烟^けの打^{うち}靡^みく。方^{うた}を案^{あん}内^{ない}み蕩^{たう}吉^{きち}ハ。九^{きう}拜^{はい}一つ、

悦^{よろこ}びを。述^のる暇^{ひま}も。春^{はる}の日^ひの暮^くぬ中^{うち}みと突^つと起^たて。烟^けの中^{うち}に入^いりと思^{おも}ひ。忽^{たち}ち見^みへびありみけり。或^{ある}人^{ひと}問^と云^いく。此^{この}段^{だん}滑^{くわ}替^{がい}史^しみ似^に氣^きなく。殊^{こと}に真^ま面目^{めい}みりて面^{めん}白^{はく}あらび。と答^{こた}曰^いく。夫^そ然^{しか}らん。然^{しか}れども這^こへ。發^{はつ}端^{たん}みりて未^{いま}ど。真^ま味^みの有^ある處^{ところ}みあらび。予^よハ固^{もと}より意^いを傾^け洲^{しう}み注^{しゆ}ぐを以^{もつ}て。只^{ひた}管^{すう}蕩^{たう}吉^{きち}。旅^{りょ}行^{かう}を急^{いそ}がしたれば。初^{はつ}編^{へん}下^げの卷^{まき}より。以下^い下^げ至^{いた}らば。焰^{えん}魔^ま大^{だい}王^{おう}も必^{かなら}び。願^{がん}を解^とべ。是^{こゝ}以^{もつ}て。前^{ぜん}譚^{たん}の罪^{つみ}を贖^{あが}えんと欲^{かう}す。

粹學新論一杯戲言初編上の巻終
幸ひ咎むる勿れ

粹學新論一杯戲言初編上の巻終

010190532041

